

史料紹介

江戸時代の日蓮真蹟鑑定記録

―日等『蓮祖御筆真偽拝見記』(上)―

寺尾英智

凡例

一、この翻刻は、京都市左京区仁王門通川端東入大菊町 日蓮宗頂妙寺に所蔵される日等自筆本『蓮祖御筆真偽拝見記』を底本としたものである。

翻刻については、所蔵者である頂妙寺の貫首永田恵遠上人より御許可をいただき、調査に関しても御高配をいただいた。また、原本の調査については、執事である藤井照源、河合陽雄、二之部知孝各上人には、特にお世話になった。学恩に深謝する次第である。

一、翻刻にあたっては次のようにした。

・原則として、漢字や仮名については通行のものに直した。

・原本の文字が判読し難い箇所は、その字数を推して□でもって示した。

・私に読点、並列点を施した。

・日蓮真蹟を模していると考えられる文字は、ゴチックで表した。

一、『蓮祖御筆真偽拝見記』は上下二冊から成っている。今回は紙幅の関係から上を紹介し、下は次回に譲った。解題は下の後に付すこととする。

(表紙)

「八第六十号 七ノ四

聞法山頂妙寺什宝圖

蓮祖御筆真偽拜見記上

真如院日等納之」

一 辛丑霜月上旬、鷹峯住人森田図書より蓮祖之書一枚本尊一幅真偽尋

来候、富士日興聖人之加判有之、授与書者鍛冶棟梁助宗と有之、

御名判之下ニ細字ニ而日興聖人御名判有之、要法寺日眷聖人入一

覽候処、日興聖人〇真筆無疑之由申来候、又梶折日近師入拜見

候処、真偽未分明之由申来候、我等愚眼ニハ蓮祖之御本尊を日興

師御拜写被成候筆蹟歟と被存候、使早崎大学、

一同月、松崎妙宣寺内大乘院旦那兩人同道候而、像師紺紙金字之書

一枚本尊持参候、紺紙者至極古紙なり、金字ハ金色新敷候、筆勢像

師御筆とハ難見分由申渡也、

一同月、当峯之住人門前弥兵衛取次ニ而、蓮祖一枚本尊一幅・御消

息一幅真偽尋来候、偽中ニも別而鹿筆ニて、本尊者日亨聖人之添

状有之、名当永井十左衛門殿と有之、愚推此添状之真筆之本尊を

似写〇真筆と取替候而、日亨上人之添状を指加世上ニ出候と被察

候、持主ハ二条通阿い之町東へ入ル町吉田清右衛門と申仁より頼

来之由、

一 紫竹村常德寺内寿延院取次、御消息一幅持来候、御真筆無疑処也

則任望候而証判書出候、持主菱や市郎右衛門と申仁室町通、同月

一 狩野求馬と申仁、同年十二月朔日入来有之、其志趣者〇元本法

花宗ニ而有之候処様子有り、其後浄土宗ニ成候、只今又本之宗旨ニ

成度願望有之候、我等を信仰之由ニ而受法被望候間、則授戒致候

而受法之本尊一幅遣候、法名心如と名付候、翌二日為一礼雪村之

掛物一幅柳に鳥之図持参有之候、同三日又入来候、蓮祖之一枚本

尊持参有之、真偽被尋候、致拜見候処偽筆ニ而候、且又此本尊者

四五日已前頂妙寺方丈ニ而致拜見候、其旨申渡也、其時彼仁被願

候趣ハ、已後此本尊他所より真偽尋来候ハ、有無之事なしに此本

尊之事ハ委細求馬方へ被申合候と計り返答被成候様ニ被願候、此

願何共難心得故、其後以使僧左様之偽妄成事ハ堅難成段申遣候へ

ハ、無是非との返事ニ而候、此仁住所黒門通下立売下ル西側、江

戸狩野常信之子と被申候、上京已後五年ほと在京之由ニ候、不審

成仁昧ニて候処、はたして其後右之本尊に我等〇遣候授法之本尊

相添、此蓮祖之本尊真筆無疑との験ニ我等〇本尊相添候由妄語申

候而、処々へ見せニ遣候由伝承候間、早々以使僧偽妄之事タ、し

申遣候、前方持参候雪村之掛物并其外少々来候物同時に彼方へ返

し候、我等本尊此方へ早々被返候由申遣候処、此本尊者返し無之

候、油断難成事共あきれ候、

一同十二月十二日、蓮祖三枚統之本尊持来、取次ハ大黒屋伝兵衛と

申仁、持主ハ八幡町柳馬場東へ入ル町ひのや七兵へ手代新兵へと

申仁也、裏書証判日重聖人・妙伝寺日健師・本法寺日近師、又外ニ日允師之添状有之候、是者皆真筆と相見へ申候、本尊ハ鹿筆之似せ物也、不審例之取替歟、允師証文之名当寿詮庵と有之、

一同十二月七日、嶋屋四郎右衛門所止宿候時、下長者町大宮西へ入ル八文字や新兵へと申仁、蓮祖三枚統之本尊持来候、取次大黒屋伝兵へと申仁也、無表具也、偽筆之由申渡ス、

一同月中旬、当峯妙秀寺取次、蓮祖之御消息御名判有之、偽筆之由申渡也、此御消息者同年之春頂妙寺より真偽尋来候、似せ物之中ニ此消息者上之似せ物と可申候、随分と似せ候へ共真筆勢とハ格別ニ有之候、此消息を日近師御写被成候添書有之候、此写書之内ニ本書と三字之違有之候、此写書も不審ニ存候由申渡也、

一同月十七日、要法寺日眷師御御状被相添候而、蓮祖三枚統之本尊来候、偽筆ニ而候、小倉屋宇兵へと申仁持参候へ共、御状面ニハ三文字や儀兵へと申仁所持候由ニ而被来候、人替不審く、

一同月廿六日、聖護院門前上原昌節と申仁、蓮祖之本尊三枚統所持有之、伊勢屋常閑と同道ニ而入来、偽筆之由申渡也、

一享保七壬寅年正月九日、本国寺日達師より状被相添、宝泉坊取次俗三人同道、蓮祖三枚統本尊持参候、此本尊者旧冬も見せ来候、偽中ニ而も不宜鹿筆ニ而候、允師添状有之、此状者真筆ニ而候、此状之内ニ直ニ日東聖人・日近聖人列名之証判有之候、愚推ニ者例之取替物、其本之真本尊者隱置候而、真之添状計を偽筆ニ相添出候歟と被存候、此類数多相見へ候、

一同正月十日、北野本瑞寺入来、像師三枚統本尊持参候、偽筆之由申渡候、持主ハ室町通丸太町下ル一文字や伝兵へ手代徳兵へと申仁所持之由被申候、

一正月八日、蓮祖四枚統之本尊、持主者糸屋町勸世之町井筒屋加右衛門之子息升や仁兵へと申仁所持、当峯万屋三右衛門取次也、真筆無疑、殊更委細之勸請珍敷本尊大宝と申渡候、付法沙門日興授与之と有り、建治二年丙子正月元日と有り、十羅刹女之内第六名者闕如有之、表具裏ニ男女三百人余り列名有り、表具師権兵へと有り、又家原次郎太郎・鏡屋半兵へ・心性院日見・十一屋忠右衛門・講中と有之、任望候間証判別紙ニ書記相渡候、

一同月廿日、本国寺勤持院状被相添候而、丸や藤兵へと申仁、蓮祖三枚統之本尊持参候、偽筆ニ而候、其旨申渡也、此仁之宿宅たこやくし烏丸東へ入ル町之由、

一前ニ挙ル四枚統本尊横壹尺七寸竪四尺六寸、

一同月廿六日、本国寺方丈ニ而蓮祖三枚統之本尊、宝泉院取次ニ而拜見候処、首題計ハ見事に相見へ候へ共、脇書勸請者鹿筆ニ而建治二年丙子正月十六日と有之候、経字之糸へん糸如此有り、是之経字者前ニ挙候四枚統本尊之経字と全同之首題、御名判も全同なり、日付計ハ替り年号月ハ全同也、如何不審なり、

一寅二月十三日、鳴瀧之道心者道喜と申僧取次、ひきし町井つゝや伊兵へと申仁、蓮祖紺紙金字之本尊持参候、是者御かたき之上を金泥にてとめし本尊なり、とめ細工も殊外下手と見申候、惣而蓮

祖之本尊之内紺紙金字終ニ不拜見候、

一 同年四月朔日、日寿聖人取次、蓮祖三枚統本尊式幅持參也、二幅共ニ偽筆なり、持主ハ美濃国本願寺住僧春道と申僧也、今ハ大坂福嶋ニ住也、隆光院と云也、右同道人者本やなひ川甚三郎堀川仏光寺下ル町、

一 同四月四日、性惠僧状被相添蓮祖之御消息持參候、御真筆無疑者也、持主ハ押小路ふ屋町くり山道栄と云也、前方ハくり山宇兵へと申候由云々、

一 同六月十日、本国寺宝泉院より蓮祖御消息来候、弘八云既云等之

二 行真筆無疑者なり、日愜聖人之証状相添、又遠師守本尊二幅、

内巻幅者延山人寺己前之御筆也、又巻幅者入山已後、何も真筆也、寛永四年之御筆者弥々上を墨ニ而とめ候と相見へ候、おしき事也、

一 同日、北野感応寺より蓮祖一反首題一幅・十界勸請一枚本尊、又御消息見せ来候、一反首題ハ御かた木之上をとめ申候物也、一枚本尊ハ一向之偽筆上字不似也、御消息者他筆似せ物也、

一 近江ひこね之近所平田村家名浅屋上田久兵へと申仁、蓮祖御消息取次頂妙寺衆徒より同道候而証文遣候

一行物持參候、真筆無疑也、其当座証判願候へ共不遣候、九月廿四日又入来証文願候、此時遣候、前方ハ取次も無之願故不遣候也、

一 東洞院通四条下町菱や太郎兵へと申仁、蓮祖一部一卷持參也、本能寺内宝昌院と同道也、致拝見候処至極之細字故、筆力之真偽難見分段申渡也、惣而一□^宗之諸山之内ニ如此細字御経之きれも無之、蓮祖之細字と申来候ハ今時之中文字なり、

一 近江代官内衆吉田専介と申牢人なり、蓮祖三枚本尊持參有之候、偽中ニも別而不宜也、七条辺ニ住居候由被申候、

一 大坂太左衛門橋万屋勘兵へと申仁、祖師御名判有之、当名者入道殿と有之御消息持參候、日充上人ハ御状被相添清輪房同道也、拜見候処偽中ニも別而不宜物也、添状者日通と有之候、本法寺日通師之筆蹟ニも無之、延山日通之筆ニも無之、終ニ見不及筆なり、

一 同年十月廿六日、伏見小西三郎右衛門より状被相添候、錢屋新兵へと申仁、蓮祖三枚統一幅・佐渡百幅之本尊持參候、二幅共ニ偽筆也、佐渡百幅之板木物ニ而候、是ニハ朗師之加判有之候へ共無心元加判ニ而候、

一 同年十一月二日、頂妙寺方丈ニ而像師本尊三枚統首題之上天蓋之繪有之、経字之下ニ蓮花座有之、良桂律師授与書有之、証文者妙頭寺歴代日豊聖人・日精聖人兩師之添状有之候、此添状者髓ニ真筆也、愚眼力ニ而者難見分由申渡也、

一 同年十二月廿六日、四条之役者岩井半四郎と申仁、蓮祖之御消息二行物持參有之、成ほと真筆疑無者なり、則依願望証書之判形相加遣なり、

一 享保八癸卯年二月四日、蓮祖三枚統之本尊、持主宇治茶師里村甚兵へと申仁、取次頂妙寺内真淨院也、偽筆之旨申渡也、

一 同月日、本尊九幅持来也、持主大坂住人岸和田や喜兵へと申、此仁ハ不来候而京住人徳兵へ・徳左衛門と申兩人持来候、名代頼来

之由、取次者本國寺内本行院同道也、方丈之近習智禪院ノ状被相
添候、皆偽筆なり、九幅之内像師本尊一幅有之候、又蓮祖之紺紙
金字本尊有之候、蓮祖之尊像有之、此繪之上ニ首題、兩方ニ釈迦
多宝、不動愛染之梵字金字也、高台之下ニ高座之内へかけて御判
計有之、繪ハ御說法之図なり、絵師ハ其時分之名筆大藏之筆之由
申伝来候、繪之事様子不存也、金字者御かたき之上を金泥を以と
め候様ニ相見へ申候、筆勢書候物とハ不被申候由申渡也、像師筆
難見分物なり、其外ハ似物、又ハ御かたき之上をとめ候物也、

一 同年二月十七日、本國寺日達上人より蓮祖御筆来也、守護章・秀
句・大集之要文六行有之候、是者祖師宗旨建立已前御學門之時分
之筆蹟也、此御筆之類正中山ニ有之候而、日弁上人之添状も有之
候、当世者此御筆之類稀之由及返答候、反古之裏ニ被遊候と見へ
申候、裏之文字日弁二字すきとをり表へ見へ申候、添書ニ而ハ無
之哉と申遣候、

一 蓮祖老枚本尊持主川原町万屋、取次外山宗米同道ニ被来候、授与
書法花行者第一優婆塞等之書付有之候、弘安二年、此本尊者同月
四日大坂ノ九幅持參候内之一幅ニ而候、此似筆有遠師之本尊を常々
似せ候人と被拜候、首題者遠師流之筆蹟也、

一 同廿日、備後岡山妙頭寺末寺妙心寺より頼来候、持參之僧者同國
太然寺之寺主、取次者近談所之海首と申所化なり、三拾式枚統蓮
祖一反首題兩方病即消滅不老不死之經文なり、日蓮之二字と判と
別段ニ有之候、四ノ本尊と申来候由ニ候、元本加藤清正所持之

由ニ而、則清正之添状有之候、天正年中也、清正添状真偽如何難
見分候、首題者鹿之中之鹿筆とも可申候、若万一清正之添状真
筆ニ而候者、是者例之取替物ニ添状を相加候と被存候、添状之写
有之候、

一 同廿一日、日啓師より見せ来候御消息七行、初ニ玄贊云と有り、
裏書当庵開祖日龍聖人御筆也、龍師者成ほと真筆紛無之候、消息
者偽筆ニ而候由及返答候、大坂きぬや、

一 同日、大坂米屋助右衛門入来候、蓮祖御筆持參有之候、是者五時
図之中ニ而第五時法花之下全分、又無量義經之下ニ二行、真筆大宝
之由申渡也、其身之眼力計ニ而無証文候へ共求候由ニ候、十行は
と有之候、新銀式百目ニ而求候由被申候、

一 同廿七日、近江ヲバマ妙仙寺頂妙寺善學坊と同道ニ而、蓮祖之小
守本尊持參有之候、拜見候処偽筆なり、其旨申渡なり、

一 同年正月廿日、於京頂妙寺四條之役者かもんと申仁、妙珠院同
道ニ而、蓮祖之御消息一行物持參有之候、成ほと真筆無疑旨申渡
也、則依願望証文相渡也、三月六日証判遣也、

一 同三月五日、妙珠院大坂屋撰治郎夫婦同道、蓮祖御消息数多持參
有之、消息ニ幅真筆也、一返首題之兩方と下と十羅刹女列名下ニ
三十番神列名有之、首題文字と兩方十女三十番神列名別筆なり、
小書者上筆と拜見候、首題不勝誰人之筆匠見分、少々中山日高師
之首題ニ相似候、

一 同三月六日、蓮祖三枚之本尊持来候、取次ならや法久、長兵へ

狀被相添候、持參人者兩人也、にしき室町通東入町かきや左兵へ・丸や伊兵へ、本尊之添狀本國寺日桓上人・妙蓮寺日東上人也、此兩通ハ真筆と見へ申候、本尊偽筆也、弘安四年之書付也、此本尊者前方ニ一度致拜見候由申渡也、是も例之本真筆取替物也、

一同三月九日、要法寺日眷師より狀被相添候而、勘兵へと申仁、蓮祖之三枚統之持參有之候、偽筆ニ而候、前方ニも拜見候由申渡也、日頂授与書弘安三年ト有り、月日墨消候而難見分也、

一同三月十四日、妙頭寺内宝聚坊同道、白川橋善兵衛と申仁、蓮祖三枚統之本尊持參候、是ハ御かた木之上を後々とめたる物也、此類世上に数多候事申渡也、

一同三月十五日、妙秀寺取次ニ而、蓮祖三枚統本尊式幅持来也、其内巻幅ハ同月九日要法寺日眷師より来候日頂授与之本尊之由申渡也、内巻幅ハ授与書、沙門民部卿と有り、弘安三年五月廿六日と有り、式幅共ニ同筆之似せ物之由申渡也、

一同四月三日、川原町宗栄所之頼来蓮祖本尊三枚統拜見候処、鹿筆之似せ物なり、祖師之御筆を不知人之似せ物也、

一同四月四日、豊後臼杵法音寺隱居智禪院入来、蓮祖佐渡百幅之本尊持參有之候、偽筆ニ而候、佐渡百幅之似物世上沢山ニ有之候由申渡也、

一同四月二日、頂妙寺へ罷越候時、撰七と申仁、蓮祖之御消息四行持參有之候、無疑御真筆之由申渡也、重而証文可届候由被申候、

一同四月廿三日、桜井左内門と申仁、妙覺寺大乘院同道ニ而、蓮祖三

枚統之本尊持參有之候、弘安三年本才庚辰五月六日と有之候、偽筆候趣申渡也、此筆者之似せ本尊前々々数多有之候、沙弥正賢授与之と有り、

一同四月廿五日、日壽師取次ニ而、智境所化本尊ニ幅持来也、此所化も他所ノ頼来候由申候、本之持主者六条花や町まきえゑ師竹村九郎兵へ、同行衆所持ニ而此同行より段々と頼来候由申候、内巻幅ハ蓮祖之守本尊勸請ハ兩尊四菩薩と不動愛染之梵字計也、右方ニ御名、左方ニ御判有之候、偽筆無紛物也、佐渡百幅之本尊小守ニ似たる物也、年号月日授与書無之也、又巻幅之守本尊是も真偽難見分由申渡也、
日朝聖人御筆

一同四月廿七日、川原町外山宗栄所ニ立寄候処ニ、頂妙寺前新ふや町川越清右衛門と申仁、蓮祖之御消息此法花經等の七行物持參候、拜見候処能筆ニ而似せたる物也、本法寺日通上人之筆力に似より候、一五月十日、作州妙法寺上人同道、了弁と申僧蓮祖御消息孔子老子等之三行物持參有之候、拜見候処偽筆之中ニ而も能筆ニ而似せ候物なり、乍去本法寺日通上人之筆力より劣候なり、

一同五月十一日、大坂本町筋屋りや町今市屋太兵衛と申仁、蓮祖三枚統本尊持參、弘安元本才戊寅六月日沙門日純与之と有り、偽筆之中ニ而も能筆ニ而、能く蓮祖之御筆を習ひ似せたる物なり、此旨申渡也、取次之頂妙寺内妙珠院同道なり、此本尊後ニ又持来也、
「持齋人也、次下ニ記也」

一同六月朔日、越後新潟本覺寺隱居宜陽院日正上人蓮祖御消息ニ行物持參候、偽筆之旨申渡、取次弟子九識院也、

一六月九日、細野久兵へ取次^ニ而、蓮祖之御筆三幅持来候、内巻幅十行式百四字真筆也、則日近師裏書有之、余式幅者偽筆之由申渡也、持主堺大てしわけや半平と申候、

一六月十八日、本国寺日達上人添状^ニ而頼来候、蓮祖之三枚統本尊一幅弘安四年^{太才}六月十三日と有之、授与書鍛冶棟梁備州長船長光順碩日元等法弟優婆塞と有之、偽筆^ニ而候、此筆者之似候本尊数多見せ来候事候、大坂住人ふしや七右衛門、京^ニ而住処大仏通連城丸菱や之前之由被申候、

一六月廿七日、嶋屋四郎右衛門取次^ニ而、扇や吉右衛門と申仁、蓮祖御本尊三枚統持参有之、沙門日頂授与之と有り、弘安四年^{太才}八月十三日と有之候、此本尊者前方も来候偽筆^ニ而候、右之外^ニ日親上人之守本尊、是ハ御かたき^ニ而候、又御消息と申来候ハ一休之筆力^ニ相似候、日印上人之墨蹟来候、此師之筆蹟しかと見覚無之、是ハ本国寺^ニ数多有之候間、見合可出旨申渡候、

一七月九日、鶏冠談所之門辺^ニ居候六兵へ之子与兵へと申仁、御消息二幅持参、此内御名判有之候、一幅似せ之内^ニ而も鹿筆之似せ也、小幅ハ他人之筆なり、右之外^ニ幅すゝにてふすほう字形不分明なり、すゝおとして持参候様^ニ申渡候、持主ハ喜兵へと申候由也、

一七月十八日、河原町外山宗栄取次^ニ而、同町之住人焼物師文右衛門と申仁、蓮祖之巻枚本尊持参候、略勸請^ニ而病即消滅之経文両方へちらしかき弘安三年と有り、偽筆之中にも別而不似筆之由申

渡也、

一七月廿日、光悦寺興聖院取次^ニ而、七条西洞院通東、入ル町河田屋庄右衛門と申仁、蓮祖三枚統本尊持参、首題之右之下沙門日頂授与書有り、又首題之左ノ下^ニ弘安三^{太才}庚辰五月十五日と有り、是者偽筆之中^ニもよき似せ物也、此筆人之似せ候本尊数多見せに来候由申渡也、

一七月廿八日、紫竹常德寺智善取次、同寺觀了坊之旦那松尾宗二感得蓮祖之御消息、去見正嘉元年と云より感応歎迄之十一行一幅見せ来也、偽筆之旨申渡^ス也、

一同年二月四日、三枚統本尊蓮祖御筆見せ来、持主宇治茶師里村甚兵へ、取次者頂妙寺内真浄坊也、偽筆之旨申渡也、

一同八月四日、弟子道応大坂旦那之頼^ニ而御消息持参有之、四行也、五月十五日下^ニ御名判有之、偽筆之由申渡^ス、此偽之筆者蓮祖之御筆能々手習修練之上^ニ染筆致候と拜見候、よほと能相似候、おそろしき偽筆也、此筆者之似候御消息、只今三幅致拜見候、

一北野本瑞寺取次、寺内英真院所持之三枚統本尊持参有之、弘安三^{太才}庚辰七月十九日沙門勝光坊授与之と有り、偽筆也、此筆者之似せ候本尊数々処々より見せ来之由申渡也、八月十四日、

一八月廿日、大坂米や町式町目左原雲拙と申仁、弟子道応方へ以書中頼来候、蓮祖二枚統之本尊弘安四年^{太才}辛巳卯月八日沙門治部卿法印日位と有之、又御消息あるからより一大事なり迄^ニ三行七月十八日御返事御名判有之、右式幅共^ニ偽筆也、其内^ニ御消息ハ能筆^ニ而

能々習覚候而書候と見へ候、おそろしき似せ物なり、持參人へ獻
峯淨妙庵也、

一八月廿三日、頂妙寺内善性院持參三枚統之本尊、弘安三年本才五
月廿六日沙門民部卿日向授与之有り、又止観より申なり迄九行半

六月十九日日蓮と計御判無之、此二幅共偽筆也、内本尊似せ候
筆者同筆之似せ本尊数多来也、

一八月十八日、二条河野豊前守殿屋敷へ罷出候様ニと五十嵐源五方
が申来候、無心元存、刻限之通庄屋名主同道ニ而參候処、用事者

けつしきありし物之内まんなら数々有之候ゆへ、真偽見分候様ニ
との事ニ候、宝物ニ四幅被出候内老幅者佐渡百幅之本尊似せ物也、
又老返首題之下ニ日蓮御名判有り、是ハ偽せ物ニ而も無之我流之

筆一向之物也、又老幅ハ玉沢之代々日達上人之守本尊、是ハ真筆
也、又老幅ハ池上代々日詔上人之守本尊也、是も真筆也、其後ニ
少々間ありて蓮祖三枚統之大まんなら被出候、此本尊ニハ権現様

之御添状有之候由被申出候処、致拜見候、偽筆無疑者也、此筆者
之似せ候本尊数多見せ来候旨申達候、権現様御添状ニ実正ニ而候
ハ、此本尊者取替物ニ而候、其真之本尊者隱留候而、似せ本

尊ニ添状を相加出候事候、此類も数多之由申渡候、弘安本才三才辰
日頂授与也、右之段々具ニ申達候而罷帰候、権現様御名判若も

虚ニ而候ハ、是ハ天下之本之判ニ成候ゆへ如何無心底存候、

一八月廿九日、蓮祖三枚統本尊来也、取次日寿、持主ハ讃州之住人
也、此仁方ハ妙覚寺寿仙坊へ頼来候を、此坊より近談所之智信上

座方へ頼来候而、此上座ハ日寿方へ頼来候次第也、只々我等祖筆
拜見之格式ニ違背候ゆへ、拜見難成旨申渡候処、此格式一向不存
候との断ゆへ、無是非拜見候処、偽筆無疑者也、此筆者之似せ候
本尊数多見せ来也、此旨此帳之内ニも度々書記申候、沙門日純ニ
授与之と有り、弘安元年本才戊寅六月日と有り、

一九月五日、要法寺日眷師より蓮祖三枚統之本尊来候、弘安元本才戊寅
八月日付ハ不見候沙門日弁授与之と有り、至極破紙破字ニ極まきら
ハし似せ物也、此筆者之似せ本尊数多見せ来也、右之断使人ニ申
渡也、

一九月八日、日啓師御状被相添候而、三条通堺や太兵へ御消息一幅
持參、弓箭家と云より南条殿名当有り、御名判有り、偽筆無紛也、
此本書之御消息江戸本阿弥光通所持ニ而候、中山輪番之節拜見由
申談也、允師之添状真偽ニ定候也、若真筆ニ定候て御消息者例之ず
り替物候旨申渡也、

一九月十二日、衆徒覚勇取次ニ而、三枚統御本尊一幅弘安四本才辛巳二
月日と有り、又御消息一幅摩訶止観より能知人是マテ六行有
り、御本尊ハ御かたきの上をぬり候物也、御消息ハ偽筆之由申渡
也、持主三条通西洞院東ハ入ル池田屋善兵へと申仁也、

一九月廿三日、本瑞寺取次、五辻通常福寺西ハ入町絹屋藤兵へと申
仁御消息持来也、本国寺日廷聖人証判有之候、偽筆之中ニ而も不
宜似せ物也、

一鷄冠之化主了遠院取次ニ而、同所喜兵へと申百姓文八云ヨリ無明

ト云ニ至テ九行之消息持来なり、最初ニ拜見之時ハ蓮祖御筆歟と
拜候故、留置度々致拜見候処、真偽難決之間証文ハ不出候、日奥
聖人歟又ハ日通聖人御筆歟無心元候、大事ニ致所持可然と申渡候
とくとす、をぬき候而、重而持参有之候様ニ申渡候、此筆後々ハ
定而御筆ニ可成と被存候、

一十月十日、本法寺内尊福院玄坊取次ニ而、三枚統之本尊持来候、添状
并裏書皆真筆なり、本尊者偽筆なり、是例之取替物歟、添状者允
師也、名当者寿詮庵と有之、允師判之次ニ前妙蓮寺日東判、其
次ニ本法寺日近判有之、本尊之裏書ハ最初ニ延山日重聖人之証判
有之、其次ニ日健師之証判、其次ニ日近師証判有之、日健師証文
之詞重師証判有之故我亦加判之趣也、日近師ハ如先判真筆無疑之
文言なり、前々へ御ゆつりの文言無心元候、将又日近師別紙証文
と又裏書と両処迄証文不審十万なり、裏書と別紙証文とハ本尊別
物歟と被察候、此本尊者去寅享保元年十二月十二日ニも持来候、持主等委
細此帳之前ニ書記なり、此本尊之主此度之持主別也、木や町三条
上ル町丸屋理兵へと申仁なり、弥不審多之也、此人同日之内ニ
後ニ来候而願申出候趣ハ、日近師裏書之通ニ我等証判相加候様ニ達
而被願候得共、其段者堅難成旨申渡也、近師裏書証判者先師ノ証
判ニ任せ御加判之文言也、

一十月廿三日、北野本瑞寺日采取次ニ而、蓮祖三枚統本尊持来候、
持主大宮通東へ入町表具屋三郎兵へと申仁持参有也、弘安四年太
才辛巳八月廿五日沙門日真授与之と有之、偽筆之中ニも不宜物也、

一十月廿五日、当峯片岡妙春取次ニ而、蓮祖之御消息地涌と云より
給へきマテ四行有之候、持主西洞院通東へ入町住吉や七右衛門と申
仁持参、裏書日允師之名判有之候、表裏共ニ偽筆之由申渡なり、
一十一月七日、紋屋厨子三上利右衛門御消息一軸江戸へ来候旨ニ而
持参有之、今此三界ヨリ仏説迄六行有之、是ハ似せと申物ニ而も無
之、自身我流ニ而書候筆也、能為救護之救字誤作拱字也、

一十一月十二日、取次ハ当庵浄玄、持主ハ近談所所化住真と申僧、
祖師金字之本尊并御消息持参有之候、金字者御かたき之上ヲ箔ニ
てとめ候、消息ハ大覺世尊より少行いへマテ三行有之、是又偽筆
之由申渡也、此住真ハ北野燈明寺弟子也、千束太右衛門妻のおい
之由申候、

一十一月十八日、慈讓院取次ニ而、近談所之化主日閑師像師老枚本
尊持参有之候、持主者化主之檀那堺之任人和泉や惣左衛門と申候
由、致拜見候処真偽未決〇之趣申渡候、妙覺寺日奥上人之裏判有之
候間、妙覺寺歟又ハ紫竹常德寺ニ有之候像筆見合可然之旨申渡也、
一十一月廿三日、取次当峯森田図書、持主ハ大坂天満松井清左衛門
と申牟人也、京竹や町堀川東へ入ル町経師藤七と申仁持参也、祖
師三枚統之本尊弘安元本才戊子六月日沙門日純授与之と有之、添状ニ三
通立本寺日審・同日芳・妙蓮寺日東也、添状者三通共ニ正筆と拝
見申候、是ハ例之取替物なり、本尊者偽筆之旨申渡也、此本尊者
同年五月十一日持来候、取次ハ頂妙寺妙珠院也、持主等委細此
上ニ記置也、持主別人也、此時ハ三通之添状無之也、恐敷事也、

一十二月四日、取次、近談所之所化、持主沢山蓮花寺之所化春山と申候、蓮祖之御消息大論より成仏迄三行有之候、偽筆之由申渡也、似せそこない也、又外ニ深自ヨリ不求自得マテ一行有之候、是ハ俗筆我流ニ而候書物也、

一十二月五日、取次、北野本瑞寺病氣故使僧住真院と申候、持主ハ常福寺通東、入町十一屋喜兵へと申候、蓮祖御消息生知ヨリ経五マテ三行半三十二字有之、御真筆無疑旨申渡也、允師裏書証判是も正筆なり、

一十二月十三日、空弁日明入来、蓮祖三枚統本尊持参有之候、様子段々物語有之候、其趣ハ夏中肥後、罷越今月六日上京候、肥後ニ而一國第一番之富人米や権兵へと申仁只今身上つふれ候、此家之道具之内此本尊無表具ニ而残有之候ヲ、空弁一類之衆質物ニ取置候而、先年大坂迄上し候処、金子三十兩ニ直段付望候人有之候へ共、無合点、于今国本ニ所持有之間、とかく真偽相究可然との事ニ而、我等預来候由物語有之候、則拜見候処、是ハ偽筆之中ニ而も能々祖師之御筆ヲ習得候而似せし筆ニ而、愛染梵字之下年月日并授与書一向ニ字滅其跡をつくろい申候、又法字ノ下蓮字迄之間字滅候、其外少て三四処ほと字損有之候、此字破候共ニ似せ物之偽と見候、其旨申渡也、

一十二月十七日、福嶋屋喜右衛門本尊二幅持参なり、一幅乾師寛永三年丙寅八月二十三日授与之信女是性、一幅遠師慶長十六年亥卯月二十六日授与之椽尾忠左衛門尉、此式幅共ニ真筆無疑由申渡也、

証文ハ重而可遺旨申渡也、

右此式幅之本尊証判重而望来、則証文相渡遺也、

享保九^甲辰年正月 乾師・遠師老枚本尊各一幅持来也、持主当峯談所円快、取次同所海輪也、真筆無疑、則証文遺也、

一正月十一日、蓮祖老枚本尊日恵師取次ニ而持来也、弘安元年^才寅八月十四日授与書之処けつり破余紙を以つきかへす也、無表具ニ而板ニ張付也、板本尊之まきらかし欺と察候、持主、

一二月二日、取次本法寺内本要院、持主丹波^{竹やノつし紋や}や故兵へ、蓮祖御消息正嘉元年ヨリ文永十一年御名判十七行有リ、偽筆之中ニも不^{ヒヒヒ}宜候由申渡也、

一二月朔日、大坂大亮院蓮祖御消息持参有之候、偽筆之由申渡也、俗筆御家流之筆勢なり、通師一反首題ハ真筆也、

一二月九日、頂妙寺善性院取次也、持主衣棚通三条上ル町黒川茂左衛門と申仁也、蓮祖書写之第八卷又御消息一行物持参有之也、第八卷者他師之物ニ而上筆也、御消息ハ真筆也、経のより方等のまて一行十七字有之候、外ニ朗師御筆ニ三行半有之候、是ハ真偽不存候旨申渡也、

一二月廿三日、室町通東へ入ルすん切町大黒屋善兵へ御消息持参有之候、信力堅固^{ヨリ}、松野殿御返事迄月日共ニ四行御名判有之候、偽之中ニ而も不宜似せ物之由申渡なり、

一二月 森田凶書持参之御消息天親ヨリ但日蓮一人なり迄二十三行御判計有之、日近師添状有之、文言不審初ニ御名判之古筆と有

り、次ニ我等拝見候事外、御沙汰無用と有り、御消息偽筆之由申渡也、

一二月廿五日、升屋仁兵衛蓮祖三枚統之本尊持参有之候、真筆無疑段申渡也、紙之中ほと上より下迄破紙なり、本化四大土勸請無之、文永十年癸酉二月日と有り、華經此二字如此被遊也、四天王梵語也、

一二月廿七日、六角通岩かミニ而福嶋^やの平左衛門より御消息一軸來候、祖筆を能々習候而似せ候物之由申渡候、尔前より三月十日迄三行半有之、御名と判と別処ニ有之候、

一三月三日、妙顕寺宝樹坊取次、御消息式幅持参、一幅ハ三蔵金剛^{ヨリ}雨を下て迄六行御真筆無疑、一幅ハ弘經^{ヨリ}惣結迄二行御真筆無疑也、初一幅耀師証判有、後一幅ハ允師証状相添也、

右二幅之内耀師証判之御消息、同月九日京地曾谷又四郎所へ持参有之候而致拜見候、三月三日宝樹坊取次致拜見、成ほと御真蹟之旨申渡也、

一三月十三日、当庵之衆徒覚勇取次、寺内妙蓮寺之前和泉屋五郎右衛門と申仁蓮祖三枚統之本尊持参有之候、偽筆之旨申渡也、題目計文字墨髓ニ相見へ申候、勸請大方文字消亡ニ不見候、御名判も文字墨分明也、二王之梵字無之、御名判之右之上ノ方ニ持国と毘沙門ニ天有之、増長・広目ニ天ハ無之、首題之両方ニ此経則為ヨリ是経文迄散しかき也、次下ノ経文ハ字消不見也、年号月日も字消不見也、惣地之紙之内処々金箔見へ申候、是者功志成ル似せ物也、

一三月廿八日、蓮祖三枚統本尊持來候、取次三雲源八、持主大宮通六角下^ル町伝兵へと申仁也、弘安四年^{本才}卯月十九日藤原国光与之トアリ、偽筆之旨申渡也、

一四月二日、信解院持参、蓮祖御消息なにへヨリたからなり迄十四行次ニ御名判有之候、偽筆之旨申渡也、

一同日、頂妙寺内善性院取次、三枚統之本尊、持主丸や庄六手代、丸屋太兵衛と申仁持参、此本尊者世上沢山ニ致所持候、蓮祖のかたきをすき写し其上を不細工ニ而ぬり候ものなり、則其旨申渡也、一四月四日、京ずん切町大黒や善兵衛御消息持参、之当人ヨリ過去之事マテ三行有之、偽筆之旨申渡也、

一四月十日、蓮祖三枚統本尊、持主大徳寺内高登院、使家来長兵衛取次門前瀬兵へ、此本尊者同月二日頂妙寺善性院取次ニ而來候、是ハ世上沢山ニ有之候御かたきを写し似せ候物也、弘安二年乙卯二月十と見申候也、此年号月日ハ一向不相似也、

一同日、三上利右衛門絹地本尊持参候、^{大サ紙三、}多宝ニ如来本化四大土計也、御判者右之下ニ有リ、左之下ニ判を離テ御名書有也、惣字三十八字也、添状証文延山遠師・立本寺日審上人・妙覚寺日奥上人・本国寺日廷師・妙蓮寺日東師已上五通也、此添状を式幅ニ分て表具有之候、添証文五通共ニ真筆也、本尊者偽筆なり、是も例之取替物之旨申渡なり、惣而京・関東諸寺ニ有之候本尊絹地と申者無之候、彼是以不審なり、

一四月十七日、御消息一幅紫竹了種寺持参也、持主妙蓮寺内堅樹院

也、日蓮かヨリ天台伝教ト云ニ至テ一行有り、偽筆之由申渡也、

一四月廿三日、蓮祖御筆大黒天神之名号七字同下ニ御名判、持主道屋清左衛門と申仁也、取次者長照院也、裏ニ日東上人之証判有之、
表裏〇之旨申渡也、又別紙ニ日東上人之添状有之ハ此添状之正筆^{共偽筆}と相見へ候、是者大黒天名号之添状ニ非ス、御消息之添状也、取合候而偽候と被察也、

一四月廿四日、蓮祖三枚統之本尊一幅、当峯万屋惣十郎取次持参也、持主糸や町井筒屋六兵へと申仁也、弘安五年太才壬午正月十九日行戒智徳沙門日頂授与之と有り、是ハ偽之中ニも眞筆之似せ物之由申渡也、

一四月晦日、祖師老枚半紙之本尊、備後水呑妙頭寺日弘来候、建治三年太才六月二日と有、病即消滅経上下ニ散し書也、至極之偽筆之旨申渡候、使僧松崎所化啓運と申僧持来也、

一潤四月五日、本国寺日達上人取次ニ而、貝や喜右衛門と申仁蓮祖之御筆持参、一幅者不動絵像也、其下ニ御名判有之、両方ニ经文有之候、御名判者偽筆也、经文ハ上代之勝筆也、非祖筆也、又念字已下二行之消息者一向偽筆之旨申渡也、

一同月七日、取次嶋屋四郎右衛門、持主同町塩や八郎兵へ、蓮祖三枚統之本尊弘安四年太才八月末一日沙門治部卿日位授与之と有り、是者偽筆之中ニ而も別而不宜似せ物之旨申渡也、

一同月同日、取次梅津本福寺、野口四郎左衛門佐渡百幅之意枚本尊又天台伝教等の四行、又諸也之等の三行半也、本尊者聊之手習之

後似せ候筆也、御消息ハ式幅共ニ下筆似せ候由申渡也、

一同月九日、蓮祖佐渡百幅之本尊、持主者出羽秋田久成寺弟子也、近談所之学士智光申也、取次者日寿上人也、偽筆之由申渡也、

一同月十六日、御消息持来、取次ハ近談所玄能感通也、又立本寺塔中大応院、同所本乗坊也、二重取次也、持主ハ淨福寺通笹屋町角万屋治兵衛と申仁也、如來ヨリ已下四行有り、弘安二年太才己卯二月日と有、御名判有之也、是消息者偽筆之中ニ而も別而不宜似せ物之旨、則感通へ申渡也、

一同月十七日、蓮祖漫茶羅式幅・大黒天神之名号持参、取次者能勢宗寿也、持主者下長者町智恵光寺西へ入しなのや孫兵へと申仁持参也、本尊者式幅共ニ御かたきなり、内巻幅者前方ニも来候、御かたき之上をぬり候而ふすへし物也、年号ハ弘安と見へ候へとも不分明也、月ハ卯月日と分明ニ見へ申候、又名号ハ是も前方長照院取次ニ而来候、偽筆之旨申渡也、

一同日、五時之略図持来也、取次ハ近談所之所化習心僧也、持主ハ上鳥羽村実光寺法光院と申僧也、花嚴経と云ヨリ円頓義齋迄六十三字有り、蓮師御眞筆無疑旨申渡なり、則任願望証文相加なり、一同月廿一日、本国寺宝珠院取次使僧知文と申也、持主嶋原江戸屋長左衛門と申仁也、蓮祖御筆之由也附文ヨリ全同之歟マテ三行二半有之候、是ハ蓮祖之御筆跡ニハ非ス、御弟子方之筆蹟と拝見致也、何レノ師と申事見分かたき由申渡也、

一同月廿八日、蓮祖御消息持来候、持主周州山口妙泉寺、取次者立

本寺内勸持院、当庵之衆徒了雅也、と勘ヨリ伊東ニ至テ八行有之、内五行者上之通三四字つゝ字破消一向不見分也、文言之内ニ日蓮之二字分明ニ有之、御真筆無疑念旨申渡也、証文者不被望候故不遭也、弘度由被申候也、

一 五月朔日、蓮祖三枚統本尊持来候、取次川原町外山宗栄并新地川越清右衛門、持主車屋町通竹や町下ル井筒屋彦兵衛也、本尊之内年号月ハ弘安四年太才八月廿五日沙弥日真授与之、是本尊者偽筆之中ニ而も少も不似偽筆之写也、此本尊守保八年卯十月廿三日ニ持来候、此帳之前ニ書記也、

一 同月二日、三枚統之本尊持来候、持主丸太町通寺町西へ入ル木瓜や孫九郎、取次ハ昨日之同人也、弘安四太才年八月十五日沙門日高授与之と有り、偽筆之旨申渡也、此筆人之似せ候本尊数多来也、一 同月三日、三枚統本尊持来候、弘安四太才年九月日と有、偽筆之旨申渡也、此筆者之似せ候本尊昨日も持来候、此本尊も前方持来致拜見候、本国寺日桓僧正之証文状相添候、添状之紙地ニ金泥ニ而牡丹と雲之絵有之候、此添状者正筆と見へ候へ共、此本尊之状と難見届候、又妙蓮寺日東上人添状有之候、是者分明ニ偽筆と相見へ申候、

一 五月六日、三木周斎蓮祖三枚統之本尊日高授与書持参、取次外山宗栄也、我等証文状と一通相添持参也、此本尊已上三度見せ来也、偽筆之中ニ而も一向不相似之由申渡也、然而我等添状者証文ニ難成由申渡候、子細者御勝筆疑無之と書候、此文言可被心付

者也、真正之筆と申事ニ而無之候、惣而偽筆之中ニ而勝筆劣筆段々有之候、其中ニ此御本尊者勝筆無疑之と申文言ニ而候、且又此状之当名きりぬき候事千万不審ニ候、此本尊ニ相添候状ニ而ハ無之候、此帳之初ニも記置候享保五年六年十二月狩野求馬と申絵師本尊持参有之、様々願申懸候而辞退無成様ニ成候時、暫時只案を凶し勝筆之文言を以而彼文望をふたき候事也、彼仁之はかりこと此帳之初ニ委細記也、其時之月日能相当り申候、其時持来候本尊ハ志枚本尊也、名当有之而ハ分明ニ偽妄しれ候ゆへきりぬき候と被察候、添状追書之中ニ僧方一対つゝ被下忝と礼筆相加候、前方彼仁入来候時、弟子二人方銀子一包持参有之候、彼是以彼仁之はかりことと存候、

一 五月十九日、升屋長九郎と申仁蓮祖御消息持参、妙頭寺内宝聚坊同道也、三蔵より下てト云迄六行七十九字有之、此内天台之二字ハけて有之、真筆無疑也、依望則証文遣也、耀師之証状も真筆也、

一 五月十日、了遠院入来、蓮祖之大漫茶羅持参也、持主者興西宗円数年所持之由内々聞及也、則拜見候処、此本尊之元者房州妙本寺之大宝ニ而文言無類之本尊、昔年江戸ニ而開帳有之候、其時此本尊之御かたき摺出候而望の方へ遣候、我等も致所持也、唐紙巻枚ニ摺出也、引合拜見候間勸請并大サ全同也、字形筆勢ハ不相似候而、格別劣候而偽筆無紛由申渡也、日啓師・日宣師・日達師・日精師・日充師各丁寧之証文被出候、後々世上之笑縁ニ可成と氣

毒ニ存候由申渡也、

一五月廿四日、衆徒淨玄蓮祖志枚本尊持參也、拜見候処、此筆者遠師之御本尊常々習候人似せ候偽筆之由申渡候、前方ニも此類筆持来候由申渡也、

一五月廿六日、日親上人守本尊持来候、取次者近隣之安兵へ也、持主者本立寺裏門通大黒町材木や又兵へと申仁持參也、長祿三己卯年九月十二日常祐授与之と有り、似せ物之由申渡也、

一同月同日、大坂吉野や清右衛門より状相添候而、播州阿古高光寺日成上人入来、蓮祖之御消息持參也、法華經と云ヨリ人々御返事迄九行有之、此内老行ハ月日と御名判なり、此筆者至極功者なる似せ物之由申渡也、おそろしき偽筆也、さつと拜見候而ハ全駄祖筆と見るなり、御判ハ分明ニ偽と見ゆる也、

一六月朔日、森田図書蓮祖御消息持參有之候、持主ハ北面松波左衛門と申仁也、大秘法ト云ヨリなり八九行有之候、是者鹿筆を以似候偽筆之由申渡也、

一同月四日、齊藤栄元取次ニ候、親師一反首題御名判有之候、持主者堂上方出入之尼之由ニ候、真偽難見定候由致返事候、此首題前方ニ我等拜見候而答候由申參候へ共、其段一向不覚候旨申遣候也、
一六月廿日、本国寺日達師々御消息見せ来候、使智禅院也、送給候品々ヨリ御返事マテ六七行、此内ニ月日御名判有り、偽筆之旨申渡也、此筆者ハ御家流之能書と相見る也、

一同月廿七日、今出川通千本西へ入二町目三文字や市兵へと申、蓮

祖御消息持參也、今此三界ヨリ能為救護迄三行有り、次ニ斯人行世間ヨリ諸幽マテ一行有之、真筆無疑者也、近師証判裏書有り、一經最要ニ文最可為家珍永護之証語有之候、取次大虚庵觀空、

一七月十日、森田図書御消息持參有之候、正覚坊より至ニ至テ偽筆也、是ハ似せ物ニ而無之、御弟子方蓮祖之御筆ヲ習候衆、自分筆力ニ而書候物と相見ヘ候由申渡也、

一七月十二日、升屋仁兵へ方々質物ニ来候由ニ而、蓮祖之志枚本尊来候、弘安ニ太才年九月三日沙門日高授与之と有之、偽筆也、我等証文相添来候、此証状を相添候本尊三度来候、三度共ニ本尊ハ相替り別之本尊ニ而候、此状ニ者様子有之、証文ニ難成旨申渡候、状之名当きりぬき有之候、此帳之前ニも記候通、是ハ狩野求馬方へ遣候状ニ而候、文言ニ勝筆無疑と書候事可心留者也、

一七月（ついで）いさ町かたき九兵へ所持之御消息、当庵淨玄取次、妙法蓮花經ヨリ導師迄七行有り、偽筆之由申渡也、

一七月廿一日、竹仏（たけぶつ）如水蓮祖御本尊式幅持參也、其内三枚続本尊者弘安四（ほん）辛巳九月日と有之、添状式通本国寺日恒上人・妙蓮寺日東上人也、此本尊当五月三日或人持參候而致拜見候、其時も偽筆之旨申渡也、日恒上人之添状計者真筆也、是添状者此本尊之添状ニ而無之と見ヘタリ、右ノ一字泛尔之語也、添状之紙地ニ金泥之繪有之候事も甚不審也、此帳之前ニ委細書記也、

又守卷幅者至極鹿筆之似せ也、一字も不相似也、祖師之御筆を一向不存人之慰書と見ヘタリ、

一 七月廿三日、蓮祖一返首題建治二年三月日と有り、授与書ハ字消不分明也、天照・八幡と天台・伝教ト勸請なり、是ハ御かたきを写し其上ヲとめ候物と見る也、不宜由申渡也、持主四条通柳馬場へ、入町丁字屋次郎兵衛子息惣兵衛と申仁也、取次表具や市兵衛也、

一 七月廿六日、像師老枚本尊持参也、丙子八月九日と有り、授与書ハ字消不見候、裏書日奥上人証判有之候、是ハ妙覺寺日奥上人と相見へ申候、真偽無心元候、裏之一方ニ堺之住人勝左衛門尉宗吉と有り、持主ハ堺弘経寺より頼来候、取次ハ妙頭寺内寂如坊持参也、本尊無心元由申渡候、

一 八月十六日、森田図書蓮祖御消息持参有之、御所労等ニ行有之、偽筆之旨申渡也、併此筆者上代能筆と見ゆる之由申渡候、

一 八月廿四日、善性院取次ニ而、新地井つゝや五兵へと申仁蓮祖三枚統本尊持参有之候、沙弥正賢授与之弘安二年太才庚辰五月有之候、此本尊者去年四月廿三日、桜井左内と申仁妙覺寺大乘院と同道ニ而持参有之、偽筆也、此筆者之似せ候本尊、世情数多由申渡候、此帳之次上ニ記置也、

一 八月廿五日、油小路一条上ル町京や庄右衛門と申仁、兵衛紫竹清順坊と同道ニ而、蓮祖一返首題持参有之、鬼子母・十女計〇勸請有之、又兩方ニ病即消滅不老不死之経文有之候、是ハ偽筆之中ニも一向一字も不相似偽筆之由申渡也、

一 八月廿七日、本国寺智禅院取次ニ而、若州之住人津田徳右衛門と

中、蓮祖之一返首(題脱カ)持参有之候、妙頭寺日紹上人・日延上人証文状有之候、首題者偽筆ニ而候、又〇似せ候物ニ而も無之、自分之流を以ましニ書候筆なり、併随分古キ物ニ而紙色態とふるむかし候物ニ而無之、自然とふるく成候物也、六老僧・中老僧方之筆歟と相見候由申渡候、証文別紙ニ有之候、此両上人之筆ハ真筆ニ而候、但し取替物ニ而ハ無之哉と不審なり、

一 九月三日、頂妙寺善往院所ニ而、常師之本尊拜見候処偽筆なり、此筆者ハ本法寺日親上人之御筆を習候筆と見ゆる也、本法寺流之筆跡なり、

一 九月四日、嶋屋四郎右衛門取次ニ而、蓮祖三枚統之本尊持参候、持主たこやくし通堀川東へ入町表具や下村瀬兵へと申仁持参也、此本尊已上三度来候也、此帳之上ニ記置也、本尊裏書延山日重上人之次ニ日健上人、此師者日重上人之証判に随ひ加判之文言也、其次〇ニ日近上人也、此師之筆者偽筆也、又別紙ニ日允上人之証文状有之、同紙之内ニ日東上人・日近上人之証判有之、此三師之筆正筆也、当名ハ寿仙庵と有之、肝心之本尊者偽筆也、是ハ例之取替物之旨申渡也、

一 九月六日、米屋経兵衛取次ニ而、日像菩薩之本尊持来候、持主なしのき町今出川下ル町志賀や久兵へと申仁持参也、是ハ一向之偽筆之由申渡也、日像師に菩薩号有之候、大覚大僧正ヨリ始テ菩薩号〇之、

一 九月十三日、きしのいた円行寺弟子貞静学士蓮祖老枚本尊持参候、

取次近談所之海琳学士也、弘安貳年三月十三日と有之候、此本尊物偽筆之中、而別而不宜之由申渡也、

一 九月廿一日、丸や經兵衛取次ニ而、蓮祖三枚統之本尊持參候、持主太虚庵行專僧也、其本ハ中長者町室町田中玄養と申医者也、沙門治部卿日位授与之弘安四本才八月末一日と有、鹿筆を以似候偽筆也、裏書日允師名判有之候、是亦似せ候鹿筆也、

一 九月廿二日、御幸町通八幡町下、仏師伊織と申仁、蓮祖之御筆持參、大黒天之名号両方ニ不動・愛染之梵字下ニ御名判有之候、是者鹿筆之似せ物之由申渡候、外四行ほとこの消息是も偽筆之由申渡候、

一 九月廿三日、仏師如水取次、蓮祖三枚統之本尊、持主烏丸通仏光寺下、絵師中沢勝介と申仁持參也、是者御かたき之上とめし物なり、弘安二年本才己卯四月八日と有り、

一 九月廿六日、当峯万屋惣十郎取次ニ而、蓮祖之三枚統本尊持来、持主衣たな通二条下、町越後や清心内長次郎と申仁也、沙門日真授与之弘安四本才八月廿五日と有之、此本尊者去年十月廿三日北野本瑞寺日采取次ニ而持来也、此帳之次上去年分之下ニ記之也、持主別人也、偽筆旨申渡也、

一 十月二日、北野寺恵光寺取次ニ而、三和安益と申仁、蓮祖壹枚持參也、鍛冶棟梁藤原助宗授与之と有之、御名判之下ニ日奥上人之名判有之、弘安二年本才卯八月廿一日と有り、此本尊者今年五月廿三日当庵衆徒浄玄取次ニ而持来致拜見候、此筆者ハ日速上人之本

尊を常々似せし人と相見候、一幅之筆形皆遠師流なり、前歳も此旨申渡也、其時之持主別人也、此帳之上ニ記なり、此安益宿所者室町通今出川上、町之由被申候、

一 十月五日、西洞院嶋屋四郎右衛門宅ニ而、像師三枚統之本尊拜見候、題目之上方ニ宝蓋有之、又四方之隅に四天王さいしき絵図有之、愚眼ニハ真筆無偽敷と致拜見候由申渡也、持主四条通烏丸西へ入井つゝや三右衛門と申仁也、經師やなり、大和郡山弘物之内ニ有之候由物語なり、

一同日、頂妙寺方丈ニ而五字之首題致拜見候、此首題ハ勝筆なり、勅筆か又ハ宮方之御筆かと拜見候由申渡候、

一 十月八日、常縁取次、丸太町通烏丸東へ入町松原長右衛門と申仁同道ニ而、蓮祖三枚統之本尊持參、此本尊者世上沢山ニ致所持候、身延山より出し板行之本尊と全同なり、併御かたきニ而ハ無之、直ニ書候本尊なり、兩梵字計ハ字形替り候、此本尊之裏ニ帳付有之候、添状別段ニ取分而巻物ニしたてめ有之候、其添状之写○弘安二年己卯十一月二十二日北条時頼十七廻忌向依龜山之法皇院宣日蓮上人此時曼陀羅一幅出来、一幅ハ則最明寺道崇為十七廻忌被上、今一幅ハ甲斐国身延山ニ被残置ト云也、

天正十二年甲 六月二日書記之者也、

信長公御内甲賀弥五郎在判

右之添状を以云之者、同時ニ式幅御書被遊候ゆへ本尊全同と被申立候也、予思之ニ此添状者証拠ニ難成、其子細者天正年中ハ通ニ後

之事也、今年より近キ年也、此時に弥五郎と申仁之聞伝書難用事
なり、若天正年中^ニ而、其時分延山之貫主か又余之名高聖人方之
添状ならは用候事も可有之候、愚推^ニ之至極之上筆^ニ而御かたき
を似せ候而、身延山之板行之本尊^ニ而ハ無之と偽候はかりこと^ニ
而、兩梵字計を態と書替候と被推候、筆勢ハ全臍祖筆之様^ニ見へ
申候、恐敷似せ物也、祖筆之行字ハ行如此被遊候ヲ不存して行如
此有之候、又刃ノ字刃如此被遊候ヲ不存して刃如此似せ候、此二
字似せ物之証拠也、無刃行此三字偽筆之証拠也、御筆ハ無刃行な
り、可思之也、弘安二年^{己卯}十一月十日と有り、

一十月九日、当峯町内八左衛門朗師老校本尊持参有之候、文保二
太才^{本才}十月日日合授与之と有り、愚眼^ニハ真筆と致拜見候、併此師之
御筆を数多不拜見候間、本国寺蓋宝之内^ニ有之候真蹟と引合吟味
被致旨申渡也、^{引合候処真筆無疑候条証文相加道候、其後亦享保十一年十二月十二日再度証文出也、}

一十月十六日、桔梗屋又四郎手代^{（つとむ）} 取次鶏冠村真經手寺弟子恵空
所化、蓮祖三枚統本尊持参也、本主者恵家一家高つき^空而藤右衛
門と申仁也、此本尊者偽筆之中^ニも下筆^ニ而候似せ候筆也、又外^ニ
御消息一幅、是ハ正中中山^ニ有之候観心本尊抄之添状之写也、是又
下筆^ニ而似候故一向不相似之旨申渡也、本尊之内授与書日ノ字計
見へ候、余ハ不見候、建治此下ハ不見也、八月十三日と有之候、
一十月廿日、近隣妙善尼取次、御消息持来也、問曰若尔者ノ五字并
本会よりにかあたニ至ル^ニ行御真筆之由申渡也、持主四条通松屋
喜兵へ之由、

一十月廿六日、桔梗や又四郎宅^ニ一宿之時御消息拜見、為妙ヨリ教
名^ニ至テ五行有之、偽筆之旨申渡也、持主井上宗慶と申仁也、

一十月廿八日、本瑞寺取次^ニ而、蓮祖御本尊并御消息持来、持主今
出川通智恵光寺西^ハ入土屋勘兵へと申仁也、御消息涅槃經ヨリ闌
提迄四行半あり、御真蹟無疑念之由申渡也、本尊者一向偽筆之旨
申渡也、又外^ニうかい之石^ニつ持参也、水中^ニ而文字分明に見申
候、乍去少々不審有之也、うかい之石ハ一石一字と申伝なり、
然^ル此石^ニ者文字数多拜見候、此段不審と申渡也、

一十一月二日、伏見吉文字や勘左衛門長子十兵衛蓮祖三枚統之本尊
持来也、此本尊前方一兩度拜見候、真筆無疑者也、近師添状有之、
依望我等証文出候也、其趣証文帳面^ニ記留也、弘安三年^{太才}六月
廿三日於甲斐国波木井郷優婆塞日教末法第一行者此本尊授与之と
有り、

一同月同日、蓮祖三枚統本尊持来也、取持五十嵐源五家来河井久兵
へ、持主者烏丸通出水之行当り大次郎か、や里村おいち女なり、
此本尊者身延より開板、世上沢山^ニ致所持候御かたき之似せ物之
由申渡也、近頃も此類持参之人有之、此上^ニ記留也、
一十一月三日、万や三右衛門取次、持主菱や治右衛門蓮祖老校本尊
持参、紺紙金字釈迦・多宝、四菩薩、不動・愛染梵字計有之、文
永六年^{太才}己巳六月四日大法師日良授与之末法第一之行者也ト有之、
此本尊ヲ紺紙ニ染メ文字分明^ニ見へ候上ヲ金泥ヲ以とめし筆と拜
見之由申渡也、

十月十九日、京有賀長伯宅へ遂尋問候時、ちきりや惣左衛門御消息持参有之候、是ハ本法寺日通師筆蹟之由申渡也、又外ニ蓮祖之像土かたニてこしらへ御名判在之候、病即消滅之経文有之候、是ハ前々関東ニ而も数多拜見候、昔年土細工人こしらへ諸方へ遣候物と推量之通申渡也、

十一月十二日、深草瑞光寺へ致一宿候時、蓮祖一枚本尊致拜見之処偽筆也、此筆人者常々身延遠師之本尊似せ候仁と見へ申候、題目も勧請も皆遠師御筆之流之由申渡也、

同日、門前稻荷町ニ居候よし野や甚兵衛^{取次}ニ而、御消息拜見候、是も偽筆之由申渡候、

十一月廿日、千束太右衛門取次、妙蓮寺内住真坊旦那本能寺前五兵へと申仁同道町ニ而蓮祖之本尊持参有之候、拜見候処、佐渡百幅之御本尊を似せ候偽筆之由申渡也、

十一月廿二日、当庵浄玄取次、持主平野屋新兵へ蓮祖毫枚本尊持来候、偽筆之由申渡也、首題之両方釈迦・多宝、四大菩薩^{一行}、四大天王^{一行}、面梵字計ナリ、偽之中ニ而も不立物ナリ、其旨申渡也、

同日、頂妙寺善性院取次、御消息持来候、持主戸川新四郎と申仁、本大坂住人、只今いのかま通松原上ル町池田や安兵へ所ニ同居之由、御消息者釈迦仏ヨリあさましく候迄六行、次ニ七月十三日御名判有之候、此筆者ハ蓮祖筆蹟を一向不習似せ候と相見へ候由申渡也、

十一月廿四日、井筒や木村善左衛門ヨリ御消息来ル、玄賛云ヨリ

仏地マテ七行有之候、偽筆之旨申渡也、

十二月二日、嶋屋四郎右衛門方々蓮祖三枚統之本尊持来候、則拜見候処、此本尊者去年九月五日要法寺日眷上人より見せ来候本尊なり、年号月授与書破紙破字全同也、此旨申渡也、偽筆也、

十二月五日、嶋や四郎右衛門取次ニ而、太つ、や四郎左兵へと申仁、御消息持有之、経々をヨリ諸に色ト云マテ七行八十字余り有之候、此内^三行ハ上、半分焼失ニ而候、又其外之文字具ニかな付有之候、此かなハ後々付しかな筆也、妙蓮寺日東聖人裏書証判有之候、真筆無疑之旨申渡候、同聖人裏書正筆也、

十二月十日、了遠院御消息持参有り、釈迦ヨリ梵天マテ五行有之候、偽筆之旨申渡也、

十二月廿二日、蓮祖御消息妙法蓮花経ヨリ卯月日御名判迄廿七行有之、取次樋口喜八、持主清水了貞也、右御消息偽筆也、裏判妙蓮寺日東又比企谷池上両寺歴代日耀也、此添状之真偽未決、

十二月廿三日、嶋屋四郎右衛門御消息持参也、弘経より惣結ニ至テ二行有之、真筆無疑、即座ニ証判を遣也、

一享保十乙巳年正月十一日、表具師七右衛門蓮祖御消息持参有り、像法決疑経ヨリ法身豈取之迄三行半有之、又從又云諸法受九七字、二幅共ニ偽筆之旨申渡也、

同日、頂妙寺本光院御消息持参有之、成仏得達ヨリ常マテ二行有り、偽筆之由申渡也、是者自流之筆也、似物ニハ非也、

一正月十八日、大坂妙経寺御消息持参有之候、^(鳥脱カ)□ヨリ後家尼マテ四行

七月十日日蓮判と有之候、偽筆之由申渡也、筆力ハ勝候似せ物也、

一 正月十九日、妙頭寺日誦師ハ像師老校本尊來候、嘉曆二年^{丁卯}正月

月二日授之平為信妙門と有之候、愚眼ニ而ハ真筆と難申旨及返答候、

一 正月廿五日、龜ヤニ而祈禱之日、本国寺末寺西町ノ岡福正寺像師老校本尊持參有之、偽筆之旨申渡なり、彼寺宿坊ハ良光院之由被申候、

一同日、大坂屋撰次郎所ニ而候、御消息致拜見候、答扱テヨリ八行半建治二年九月十七日御名判有之候、偽筆之旨申渡也、

一同廿八日、川原町外山宗栄処ニテ御消息拜見、法花經より七行六月十八日御名判有之、又外ニ病即より刹女迄四行有之、右何も偽筆之旨申渡也、

一 二月六日、南都長頭寺蓮祖之老校本尊○持參有之、偽筆之中ニ而も不宜似せ物之由申渡候、妙頭寺之末寺也、大和ニ而俵本ニ寺有之候由九識院取次也、

一 当庵之衆徒淨玄取次ニ而、乾師老校本尊式幅持來候、其内天正二十年^{壬辰}五月十五日中小路理右衛門尉吉繼授与之、此老幅真筆無疑也、又老幅ハ寛永元^{甲子}九月九日授与之信女妙慶と有之候、此老幅者真偽未決之由申渡候、似せ候物とハ不相見、殊外み事ニ拜見候ハ其本尊之筆力ノ風乾師本尊之内ニ終ニ不見及候由申渡也、

一同月十四日、丸や弥兵へ取次ニ而、智恵光寺西へ入町龜や弥介と申仁、經之きれ八行ほと持參有之候、他經之文也、何經と云事不見分也、是ハ上代之勝筆也、伝教大師之筆力ニ相似之由申渡也、

一 二月廿五日、大坂堺筋平野町伏見や惣兵衛所ニ住居之豊原民部卿

と申仁ハ御消息持來候、使平野喜右衛門と申仁候、拜見候処、日妙ヨリ御返事迄八行有之候、三月十一日御名判有之候、偽筆之旨申渡候、右民部卿者前方京極左門と申候、此親ハ京極近江守と申候、京極安知之孫之由使被申候、

一 二月廿六日、紫竹常德寺ニ而蓮祖御消息拜見候、外ヨリ此語ニ至テ八行有之、八行共ニ中ほと二三字ツ、焼失せり、真筆無疑旨申渡なり、此持主ハ寺内、

一 二月廿九日、釈迦裏門前堺屋八兵へ方ヲ頼來、御消息釈迦ヨリ候迄六行有り、偽筆之旨申渡なり、取次衆徒淨玄僧なり、

一 三月三日、万や惣十郎取次、下土手柴や太郎右衛門持參候、朗師紺紙金泥之本尊正和元年九月朔日と有り、是者朗師本尊御かたき之上を金泥を以とめ候ものなり、此旨申渡也、

一 三月八日、室町通四条下ルミすや前田七右衛門と申仁、御消息持參也、仁王よりは是なり迄三行半正月十六日御名判有り、偽筆之旨申渡也、嶋や四郎右衛門取次なり、

一 三月十日、本国寺日達師取次、像師本尊持來候、持主ハ川原町四条上ル戸沢や新七、持參人者大宮通東寺石橋上ル丁いたや勘兵へなり、曆応二年己卯六月廿一日常信授与之と有り、偽筆之旨申渡也、

一 三月十三日、出京之時、嶋屋ニ而蓮祖紺紙金字之本尊持來候、取次者大仏耳縁町日請上人也、持主ハ寺町通五条上ル龜や助左衛門

と申仁也、文永六年^{大才}正月五日と有之候、此本尊者御かたきを紺に染候而文字ヲ金泥を以とめ候と見へ候、書之筆勢少も無之旨申渡也、

一 四月五日、蓮祖三枚統之持来候、持主さわらき町小川ノ東万屋市兵へと申仁也、此家来下土手船や市兵へ仁持参候、取次者当町内喜兵へ也、本尊之内ニ於佐渡国法花経一千部成就之砌此本尊図と有り、文永九年^{太才}申正月十六日と有り、是ハ偽筆之中ニ能筆を以似せ候本尊之由申渡也、

一 四月十日、河内蓮城寺取次ニ而、青木主悦と申仁入来、則蓮祖御消息持参有之、善無畏ヨリ御返事迄二十行有り、御名判別処ニ有り、弘安三年五月十六日上野五郎左衛門殿と有り、是筆者偽筆之中ニ而も不宜似せ物之由申渡也、此青木氏者大坂住処也、京ニ而旅宿者川原町通竹や町下^ル野村や五兵へ所なり、又二条与力之内間野久次郎者一家之由被申候、又右之仁持参候内ニ釈迦仏ヨリ穴賢迄三行二半有り、御名判有り、六月十六日日妙坊と有り、是者一向不宜似せ物なり、又迄返首題御名判有り、是者似せ物ニ而も無之、鹿筆ニ而我ま^ニ書候筆之由申渡也、

一 四月十一日、近談所名目所化堯心取次也、親師小本尊来、持主ハ妙覺寺裏門筋花光院町道具や加兵へと申仁也、此本尊煙ニ而至極ふるく成、南無ノ上ハ別段ニ引きけし文字分明ニ不見分也、とくとす、を取候而後真偽可申分と申返し候、

一 四月十六日、当峯本寂僧乾師・遠師老校本尊持参有之候、式幅

共ニ真筆之旨申渡也、

一 四月廿三日、東河原法性寺日能入来候、取次森田圖書妻、蓮祖一反之首題御名判有之候、是ハ偽筆之中ニ而別而不宜似せ物之由申渡也、

一 四月廿四日、近談所之上座貞正取次ニ而、日親聖人老校本尊持来候、文明十年二月十三日と有之、授与書ハ無之、偽筆之旨申渡也、持主大坂南久宝寺町御はらい筋池田や喜兵衛と申仁持参有之候、同日、同談所上座春利取次、御消息持来候なり、善無畏ヨリ是なりマテ十三行有之、外ニ建治元年三月十六日御名判強仁上人御返事と有之、偽筆之由申渡なり、持主ハ、^(七)

右之裏書乾師・日東師証判有之候、乾師者偽筆也、東師ハ真偽未決之由申渡也、

一 五月三日、惠光寺日宣^ク状相添、像師守本尊持来候、曆応三年庚辰八月十三日上杉播磨守法名頭隱授与之と有り、愚眼ニ而ハ筆力見事に拝見候へ共、決定正筆と申事ハ儘成正筆と見合候上ニ致吟味候而加証文候由申渡^ヌ也、持主新町通一条上^ル亀や源兵へと申仁なり、使僧之名玄如と申候、

一 六月十一日、近談所惠春所化取次、紺紙金泥開結合十卷之妙経持参有之、愚眼拜見^ニハ、是ハ大昔名有^ル人筆跡と相見候、名者之名不存当之間、古筆川勝宗久方へ被入一覽候様ニと申渡也、此主之本者播州之住人なり、京之町人方へ頼越候由ニ而兩人同道、三条通堀川東へ入^ル町井つゝや七郎兵へ同町布屋太右衛門なり、播州が

被頼候仁者布やなり、惠春方へ取次頼入仁ハ井つゝやなり、

一同日、妙顯寺宝聚坊旦那小川升や長兵へ取次ニ而、同町かしりや徳右衛門と申仁、御消息持参有之候、法花經第一日ヨリ経王也マテ四行半文永四年五月十二日御名判有之候、是ハ偽筆之中ニ而も不宜似せ物之由申渡也、

一近談所上座春利取次、蓮祖御筆偽筆之由申渡也、持主柳ノ馬場ニ条下ル町三文字や利兵衛と申仁也、

〔自下前後乱也〕
一七月廿二日、取次当庵衆徒浄玄、蓮祖御消息一幅持参有之候、

仏跋提河ヨリ諸義離妙マテ三行二十九字有之、其内ニ後一行ハ続合ツクロイ物也、前後共ニ偽筆之旨申渡也、裏書添状身延日新上人証判有之、天正十九^辛卯五月十三日と有之、持主釈迦堂之裏門前堺や八兵へと申仁なり、

一七月廿四日、頂妙寺本立院取次ニ而、蓮祖一反首題持参有之候、首題之下両方文永三年十月日住清澄山日蓮と有之候、此筆跡者蓮祖之御筆ヲ一向不存して似せ候物ニ而候、其旨申渡也、持主竹屋町通新町西へ入ル大和屋十左衛門と申仁也、

一七月十九日、当庵徒浄玄取次也、釈迦堂裏門前ニ而堺屋八兵へ持主也、蓮祖御消息大覚世尊ヨリ行といへとも迄三行有之、偽筆之由申渡也、

一七月廿一日、当峯万や惣十郎取次、蓮祖御消息持参有之候、天台妙楽ヨリ奉読誦者なりマテ四行半有之、建治二年十月十九日御名判ニテ御判無之、是ハ偽筆之中ニ而も不宜似せ物之由申渡候、持

主ハ万や之家ひしや七郎兵へと申仁也、

一八月四日、三条通堀川東へ入ル町布や太右衛門と申仁、蓮祖紺紙金泥之小守本尊持参有之候、是ハ御かたきを紺紙に染、其文字を金泥ニ而とめたるものなり、此類世上ニ数多有之由申渡也、上ニ天蓋之絵有之、此仁事ハ当年六月十一日近談所惠春所化取次ニ而、^紺金紙金泥之妙経持参候仁なり、此帳之前ニ記之也、

一八月五日、蓮祖之本尊持来候、一反首題兩尊と四菩薩兩方へ今此三界之経文御名判有之候、不宜似せ物之由申渡也、持主上清蔵口絹や次郎左衛門と申仁也、取次ハ当庵衆徒了円也、

一同月同日、蓮祖三枚統之本尊持来、弘安四^{太才}辛巳六月十三日と有之、偽筆之由申渡也、持主ハ堺しゆくやノ寺町善教寺と申一向宗也、取次ハ上田善左衛門と申候、此仁ノ父上田作右衛門ハ江戸ニ而念頃ニ申談候人也、宝塔寺内玉泉坊ニ奇住候日長と一門之衆被申候、宿処北野十如寺ニ居住有之候由被申候、

一八月^{マツ}近所佐野道碩取次ニ而、御消息来、一就類種ニ相對種已^{有生マテ}下ニ三行ほと有之、真筆之旨申渡也、持主者道碩懇意之仁と被申候、則証文帳ニ記置候、証判加候而遣候、

一八月廿三日、桑名寿量寺靈宝物北野花光寺ニ而開帳有之、參詣拜見候、三枚統之本尊蓮祖御真筆無疑候也、日目授与之ト有り、弘安二^{太才}己卯年二月日と有之、又御消息巻軸あらざるにヨリ讚者マテ四五行ほと有之、是も真筆無疑之旨申談也、

一八月廿四日、亀屋源介より蓮祖御消息巻軸来候、初結縁ヨリ大則

中マテ五十三字有之、真筆無疑旨申渡也、

一 八月廿五日、番町丸屋弥兵衛取次ニ而、大坂天満中嶋町丸屋助十郎と申仁、蓮祖之本尊持参有之、駿州加嶋之住人優婆塞日教授与之と有り、弘安^{元本才}戊寅年卯月日と有り、此本尊者至極上筆之力を以随分御筆を習得て自在ニ写せし筆と相見へ候、筆形之内ニ遠師之本尊之字形ニ似たる所多也、頼来候元ハ玄澄と申玄能化之隠居^{右同日}ハ丸や方へ状ニ頼来候、

一 八月廿六日、三宅宗栄取次ニ而、本満寺之衆徒善養院と申僧、蓮祖御消息持参有之候、去見正嘉元年ヨリ感応歎マテ十一行有之候、是者偽筆之中ニも別而不宜似せ物也、此正本ハ中山ニ有之候由申渡也、

一 本國寺智禅院取次ニ而、高倉通五条上ル町染物や布屋喜兵衛と申仁、日親聖人老枚本尊持参有之候、文明^{一庚寅}八月十二日永誓房与之と有り、此本尊我等愚眼ニハ真偽難見分候由申渡也、殊ニ御判形常々拜見候判形と大ニ不同有之候由申渡也、

一 八月廿八日、小川通上立売下ル町ひなや彦兵衛と申仁、日野や加兵へと申仁同道ニ而、親師之小本尊持参有之、此本尊者当年四月十一日妙覚寺裏門前花光院町道具や加兵へと申仁持参有之候、其時ハ殊外す、け文字不分明之ゆへ、とくとす、を落し文字分明ニ見合候而、其上ニ而真偽可定と申渡候本尊を、とくとす、を落し表具迄拔持参有之候、我等眼力ニ而ハ真筆と拜見候へ共、無心元事有之候間、幸近処之本法寺ニ有之候真筆見合、弥無疑之証判可

出候旨申渡候、

一 九月五日、中村所化光長取次、御消息持参有之候、釈五云ヨリ具之四得マテニ行有之、蓮祖大士之御真蹟無疑之旨申渡也、持主^ヒ江戸谷中安立寺知泉院ナリ、

一同、勝るヨリ天マテニ行御真跡無疑者也、依之加証判者也、持主中村所化光含と申文句衆也、右之式幅日精弟子光長取次なり、此御消息文字消へ難見分也、

一 九月廿四日、妙頭寺内法音院取次、越前国福居妙国寺旦那弥三左衛門与申仁、蓮祖御筆式幅持参有之、一幅者一反首題両方ニ釈迦多宝之両尊計、梵字両方共ニ不動(梵字)如此有之也、老幅者御消息時の法門ヨリしときマテ四行有、式幅共ニ偽筆之由申渡候、

一同廿三日、仏師如水取次ニ而、五条橋詰亀や七郎兵へと申仁、像師三枚統之本尊持参有之、首題之上宝蓋採色絵下ハ蓮花座採色也、四方之隅ニ四天王採色絵なり、書画共ニ古ク相見候、乍去像師之御判形終ニ不見及判形無心元候、像師門流之寺方ニ正筆有之候間、見合可然旨申渡也、

一同廿八日、要法寺日眷聖人ハ頼来候、蓮祖三枚統之本尊弘安四年^{太才}辛巳三月日と有之、授与書無之候、偽筆之由申渡也、首題・四天王・梵字者少々似候処有之候得共、勸請之諸尊一向不相似候由致返事、使勘兵ハ物語ニハ、本禅寺末寺因州之妙要寺と申寺へ旦那方ハ寄進之善と被申候、

一 十月十日、常福寺一条上ルほうきや徳兵衛持参也、御消息弘五云

ヨリ経第廿八マテ三行有之、御真筆無疑者也、此旨申渡、

一十月廿日、当庵淨玄取次、持主鶏冠所化、御消息持来候、又我ヨリ花経なりマテ二行有り、建治二年十月十二日御名判有之候、是者偽筆之中ニ而も別而不宜似せ物之由申渡候、

一十月廿一日、ちきりや西村惣左衛門方々日親師一反首題来候、寛正四年^{癸未}八月一日と有之、愚眼力ニ而ハ真筆と致拜見候、乍去此御筆ニハ似せ物数多有之候間、正筆と見合可然之旨致返事候、

一十月廿五日、慈明僧御消息持参有之候、祈三災ヨリ本門マテ三行有之候、是ハ一向之偽筆之由申渡也、

一同日、当峯本寂僧御消息持参有之候、日妙ヨリつほね御返事マテ八行有之、此内三月十一日御名判有之候、此筆者御家流之能筆と相見候由申渡也、うつくしき筆也、

一十月廿九日、門前瀬兵衛取次ニ而、蓮祖三枚統持参候、持主ハ室町通上立売上ル町西かわイノ口久左衛門母受聲、此本尊者世上沢山ニ流行有之候、身延ヨリ出候三枚統と一字一点モ不相替候、年月日無之計之替り也、手前ニ御かたき所持候と引合候処、少も不相替候也、随分ノ能筆ニ而候似せ之物と相見へ候、諸尊勸請之小書ニ而偽筆としれ申候、此本尊両度迄逐吟味也、
(欄外追記)
「此本尊之類、去年十月米候、持主松原長右衛門と申町代也、其時モ手前所持之御かたきと全同不審之由申渡也、此状之上ニ記之、」

十一月朔日、当庵寛惠僧取次、御消息持来ナリ、持主者下立売上行寺也、すてにヨリ法身マテ三行有之、是者偽筆之中にも別而不宜

似せ物之旨申渡也、

十一月二日、表具師住吉や七右衛門ノ御消息式幅持参、此内ニ弓箭ヨリ南条殿御返事マテ六行御名判有り、此一軸者偽筆中ニも不宜似せ物也、又一軸まさらせヨリたゞシマテ一行九字有り、是者御真筆無疑者也、此旨申渡也、裏書允師・近師之証判有之候、

十一月五日、知久僧取次、持主鼠屋常林也、御消息有之候、是者次上ニ記候六行御名判有之候御消息なり、偽筆之旨申渡也、

十一月十七日、蓮祖三枚統之本尊、要法寺日眷上人御取次、寂光寺日完上人ノ御頼之由、弘安三年太才庚辰正月十六日蓮花坊阿闍梨日持授与之と有り、此本尊者偽筆之中ニ而至極勝筆ニ而似せ候と相見申候、添状日審・日東・日允・日近四師なり、四通共ニ惡敷添筆ニ而候、使本性房、

十一月廿四日、嶋屋四郎右衛門取次、ひわたや利兵へと申仁、蓮祖之志枚本尊持参候、弘安三^{太才}庚辰九月八日と有之候、此本尊ハ御かたき之上ヲとめし物也、此旨申渡候、

一十二月五日、片岡半兵衛取次也、持主東山善正寺広領と申板頭也、蓮祖之御消息持来候、三千観法ヨリ色ますマテ三行有之候、是筆者偽筆之中別而不宜似せ物也、是者治病抄之最末之文ナリ、此真筆ハ正中山ニ有之候由申渡也、

一十二月十三日、妙覚寺本昌坊取次ニ而、同寺内慈雲坊御消息式幅持参有之候、□□□□戒門ヨリ弘安三辰四月九日御名判有之候、八行御真筆無疑旨申渡也、又一幅玄義云ヨリ出袖マテ二行半廿五

字御真筆無疑旨申渡也、又老幅軍吏ヨリ賜マテ書行半十三字御真筆無偽旨申渡也、右式幅慈雲坊持參候、戒門之一幅御名判有之候ハ幸林坊旦那同道候而持參有之、是ハ偽筆之旨申渡也、

一十二月十八日、妙頭寺日諦師取次、山科談所之（註）、蓮祖壹枚本尊持參有之候、此壹幅者蓮祖御筆蹟を一向不知人我流を以書もの也、偽中之偽之由申渡也、

一十二月廿八日、北野花光寺日鳳ヨリ狀相添御消息持來、使立仙所化也、持主大円寺なり、大覺世尊ヨリ行□つへともマテ三行有之候、是者偽筆之旨申渡候、

享保十四己酉年正月

一二月、頂妙寺日遂上人ヨリ親師御本尊來候、長祿三年己卯六月十日

三日沙門祐園日久と有り、偽筆之由申渡也、

一二月八日、妙覺寺本性坊蓮祖三枚統本尊持參有之候、文永六年己巳六月九日ト有之、偽筆之中別而不宜之旨申渡也、

一四月廿七日、頂妙寺方丈ニ一宿之時日遂師御頼、蓮祖御消息被指出候、阿菟樓駄ヨリ為宣説マテ五行半有之、真筆無疑旨申渡也、

一同日、嶋や藤右衛門求候由ニ而、消息之真偽見分被頼候、旦那之厚縁ゆへ拜見候、是ハ至極之上筆を以似せ候偽筆之由申渡候、恐敷似せ物也、

一同廿九日、杉浦祐倫々御消息一幅頼來候、度々病用頼入候事故難默止致拜見候、天台日ヨリ穴賢マテ三行半有之、弘安元年四月十

日下ニ御名判有之、是ハ偽筆之旨申渡也、

一五月、頂妙寺日遂師より中山祐師御筆蹟之觀心本尊抄全部來也、終紙ニ日朝師御筆ニ而添狀有之、何も真筆之旨申渡也、日近上人・日妙上人之証文被相添候、

一重・乾・遠三幅對之本尊紛失セリ、三幅共ニ表具者紺地ニ輪宝之されのよし、本主坂本彦三郎也、

真翰敢無疑網、為今後毘生信請予証判不得拒辞応其需耳、

一妙頭寺ニ有之候永祿年〇一致与勝劣和談之書物之興起者、其元根者本国寺より興候由、証文数々本国寺ニ有之候由、貫主物語ニ承候、其時分諸国共ニ一致勝劣之騒動有之候故、為乱靜三ヶ条之式目被定候由、其節之執権者三好修理大夫長慶也、且又松永彈正久秀、此兩人方へ内意通達有之、其上時之將軍高氏之末義輝公へも申上候処、成ほと尤之定之由相究、三ヶ条之式目出来候由、貫主物語ニ而候、此三ヶ条式目者本国寺ニ納置候筈ニ候処、其後本国寺無住寺ニ付妙頭寺へ頼入、只今妙頭寺ニ有之との物語云々、永祿七年ニ式目出来候由云々、